

平成21年度公開講座及び第36回高知女子看護学会報告

高知女子大学看護学会企画委員長 竹 崎 久美子

平成21年度公開講座報告

平成21年度高知女子大学看護学会公開講座は、平成22年1月30日（土曜日）高知女子大学池キャンパス大講義室において、「療養生活指導における看護の役割拡大を考える」を開催した。

平成20・21年のメインテーマである「看護の社会的責任—看護職の役割拡大を考える—」に基づき、講師には滋賀医科大学医学部附属病院継続看護室の伊波早苗氏をお招きし、『外来での患者支援 ～患者さんと共に仕立てる糖尿病看護～』と題してご講演頂いた。



伊波氏は慢性疾患看護の専門看護師として看護師による糖尿病外来を立ち上げ、患者個々の生活や身体状況に応じたセルフコントロールの方法に関するきめ細やかな相談対応から、主治医に働きかけて、患者に合わせた治療方針の調整までを実践している。伊波氏はそれらのかかわりについて、「患者一人一人に医療やケアをオーダーメイドする」という意味で「仕立てる」と表現され、患者と共に個々の病態に応じた生活を考え、主治医と協力して治療内容を個々の生活に合致させるなど、専門看護師独自の役割拡大について紹介された。

多くの実践経験と事例を通したご講演に、受講者のアンケートでは「事例を通した話が分かりやすかった」「もっと患者さん自身の話を聞こうと思った」など、多くの示唆と刺激を受けたとの反響であった。

また後半は、高知女子大学看護学部地域看護学教授の時長美希氏に、『保健師による外来保健相談の可能性』と題して講演いただいた。



平成20年に始まった特定健康診査の一貫として、特定保健指導が注目され始めている。この特定保健指導について、制度の変遷から、今看護職が社会から期待されている役割について解説され、保健師の活動が地域での保健指導に留まらず、医療機関においても役割拡大の可能性が高まっていることを講演された。受講者からは、「日頃は制度のことについて知る機会が少ないが、現在注目すべき制度に関心が持てた」、「もっと時間的に長く、詳しく聞きたかった」「2つの講演を通して、看護の役割拡大の可能性について考えることができた」といった感想が寄せられた。

参加申込者は51名のところ、当日は76名の参加があった。アンケート回答をみると、参加者の所属部署は「外来（一般／専門）」、「眼科」が多いなど、今回の講座が糖尿病や生活習慣病の患者の生活支援に対する看護独自の役割を模索するニーズに合致したと考えられる。事前申し込みはやや出足が遅かったが、募集後半には近隣医療機関の中でもテーマに関連の深い部署に対して改めてご案内するなど工夫することで、関心の高い方々に参加いただくことができた。

学会の公開講座は、今後も臨床現場の方々の方々の様々なニーズやご要望にお応えし、内容を検討していきたいと考えている。

第36回高知女子大看護学会報告

平成22年7月10日(土)、高新RKCホールにおいて、第36回高知女子大学看護学会が開催された。昨年に引き続き「看護の社会的責任—看護職の役割拡大を考える—」をメインテーマに、本年度は記念講演とリレートークを行った。

記念講演では、前国際看護師協会(ICN)会長であり、近大姫路大学学長、平成23年4月からは高知女子大学から校名変更された高知県立大学の初代学長に就任された、南裕子先生をお招きした。「なぜいま、看護職の役割拡大か?」と題して、世界と日本における看護職の専門職化の動向について、歴史的背景から社会的ニーズの多様化における看護職の責任、看護職が担うことの重要性など、様々な観点からわかりやすくご講演いただいた。

また午後のリレートークでは、「育んできた看護が拓く、新たな可能性」と題し、各方面で活躍する卒業生によるリレー講演が行われた。医療機関の看護管理の立場からは梶原和歌氏(社会医療法人近森会統括看護部長)、在宅ケアの立場からは佐藤美穂子氏(財団法人日本訪問看護振興財団常任理事)、地域看護の立場からは山本雅子氏(高知県健康政策部中央東福祉保健所次長)、学校保健の立場からは池添志乃氏(高知女子大学看護学部教授)、専門看護師の立場からは濱田米紀氏(兵庫県立こども病院小児看護専門看護師)、そして大学教育の立場からは中西純子氏(愛媛県立医療技術大学教授)である。

午前に行われた記念講演は、平成22年から新たに発足した『高知女子大学看護学部同窓会』の発足記念事業としても共催された。そのため、同窓会の会員である学部在学学生にも参加を促し、175名の参加があった。3・4回生は午後のリ

レートークにも熱心に参加し、様々な分野で現場の最先端をリードしている諸先輩たちの講演に耳を傾けた。在学生にとっては高知女子大学看護学部の歴史と、その歴史にはぐくまれ、大事にされてきた看護が鮮烈に伝わったようである。アンケートの反響では、記念講演からは「キュアとケアの統合めざす看護の大切さを改めて認識した」「普段の講義ではあまり聞けない時代の最先端の看護について聞いた」など、改めて看護を志す者としてのアイデンティティが確認できたようであった。またリレートークに参加した学生からは、様々な専門分野の講演から、自分自身も将来どのような専門分野に進むのかを模索するような反響が多く、さらに質疑を通して、フロアにいる多くの先輩たちの存在も強く実感したようであった。

学会員の参加は181名、一般参加者は33名であり、在校生をあわせると389名の参加を得た。参加者からの反響としては、現場で何をめざして看護を続ければ良いかについてのヒントをつかむことができたという声が多く、グローバルな視点から看護がこれから担うべき役割の重さを痛感するとともに、「しかしそれを担っていくのは自分たちなんだと感じた」との感想も聞かれた。

同窓生にとっては、こうした看護の最先端を語り合う場で、恩師や同窓生との旧交も温め合うことができることが重要な意義を持っており、同窓会学会としての存在意義も改めて認識させられた。今後も、看護学部同窓会との共催活動をあわせながら、常に社会から求められている看護について発信していける学会であるよう、運営を検討していきたい。